

- 1 春立つや天へ向きたる犬の鼻
- 2 ふきのたうみなどこかへ行く途中
- 3 雛の間に座つてゐたるチワワかな
- 4 鳥帰る朝の鏡を拭いてをり
- 5 涅槃図のひとりは大樹抱き哭ける
- 6 種を蒔く明日あふ人を思ひつつ
- 7 草の芽へ歩んでゐたるフラミンゴ
- 8 サークスの帰りに摘みし土筆かな
- 9 卒業や日の当たりゐる坂の上
- 10 春障子開けてピアノを弾き始む
- 11 マラソンの一列鳥の巣の下を
- 12 会ひしことなき人待てる桜かな
- 13 黄砂降る町に小さな映画館
- 14 文庫本より垂るる紐鳥の恋
- 15 春の鴨転校生の前にをり
- 16 ぶらんこや地図のやうなる水たまり
- 17 みな遠き家へ帰りし桜かな
- 18 しづかなる鉄路の上の落椿
- 19 青空は窓の大きき啄木忌
- 20 朧夜のふかひれスープ掬ひをり
- 21 パンの耳ちぎつてゐたる春の風邪
- 22 履歴書にあまたの数字亀鳴けり
- 23 腕時計わすれてフリージアの前
- 24 花散るやひろき額の男の子
- 25 立てかけし梯子夜に入る麦の秋
- 26 にぎやかな隣の部屋や柏餅
- 27 呼び鈴に一つの音符夏はじめ
- 28 青葉風小舟のやうなスニーカー
- 29 油虫打ちたる音の残りけり
- 30 廃線の跡ゆく茅花流しかな
- 31 白靴の入りし職業案定所
- 32 口笛のすぐに途切れてアマリリス
- 33 短夜や切手の鳥のうすみどり
- 34 毛虫焼く後ろ姿をみられたる
- 35 蛇の衣白き日輪ありにけり
- 36 スリッパの内側赤し水中り
- 37 背伸びして切符を買ふ子雲の峰
- 38 叱ることなき父が立つ百日紅
- 39 誰もぬ椅子に草笛置いてあり
- 40 白猫の闇よぎりたる夏越かな
- 41 夏落葉煙草の匂ひせる男
- 42 かうもりの口が笑つたかもしれぬ
- 43 はひはひの先の噴水立ち上がる
- 44 ひとすぢの道の明るき端居かな
- 45 夏帽子雷門へ走りけり
- 46 携帯の鳴つて百物語果つ
- 47 白日傘立てかけてある大櫓
- 48 玉虫の曳きゆく光水脈のごと
- 49 魚の腹裂けば魚をり広島忌
- 50 空抱いてゐる空蟬を拾ひけり

- 75 溶接の光まぶしき神の留守
- 74 玉子溶く音のしてゐる良夜かな
- 73 腕時計腕に冷たし葉鶏頭
- 72 小鳥来る真つ黒焦げのフライパン
- 71 赤い羽根回転ドアに入りけり
- 70 白菊の映れる夜の鏡かな
- 69 木の実落つ鞆に未発表の稿
- 68 十六夜や頬杖つける絵の女
- 67 鯊釣の後にゐたる女の子
- 66 鷹渡る一滴の血も零さずに
- 65 蓑虫の蓑脱いでゐる日曜日
- 64 地下鉄に空みえし時桐一葉
- 63 石段のてつぺんにある木の実かな
- 62 十五夜の電話ボックス開いてをり
- 61 秋風を聞いてゐるらしガードマン
- 60 鳥渡る何も映らぬ埴輪の眼
- 59 蝸や車窓に昔住みし町
- 58 糸瓜忌の冷たき水を汲みにけり
- 57 鬼の子の前で挨拶してをりぬ
- 56 手折りたり一草庵の猫じやらし
- 55 縞馬の眼うるみし残暑かな
- 54 生身魂庭木数へてゐたりけり
- 53 泣きやまぬ赤子八月十五日
- 52 ゆふぐれの草の匂ひや星祭
- 51 朝顔や手帳に雨の二三粒
- 76 ふるさとの冬山楯の如くあり
- 77 耳飾ほどの冬芽に触れてみし
- 78 旅鞆枯野の匂ひありにけり
- 79 紅の袋の中の湯たんぽよ
- 80 シヤム猫の庭よぎりたる湯ざめかな
- 81 火事を見に来たる自転車倒れけり
- 82 手のひらに小さき傷や日向ぼこ
- 83 開戦日ヘッドホンより漏るるジャズ
- 84 冬川の水動かざるところあり
- 85 珈琲を淹れ狐火の話など
- 86 指揮棒に新しき傷冬銀河
- 87 山茶花や昼間は誰もゐない家
- 88 歩きつつ考へてをり冬木の芽
- 89 痩せ犬の水飲んでゐる冬夕焼
- 90 特急の通り過ぎたる干蒲団
- 91 先生の生まれし町や雪降れる
- 92 煤逃げに来て突堤の長かりし
- 93 母に似し人見送りぬ冬椿
- 94 数へ日や高速バスの二階席
- 95 象の鼻曲がりて伸びる大旦
- 96 初夢のしまひまで我あらはれず
- 97 柿の木に日の移りたる手毬唄
- 98 川の石拾うて帰る二日かな
- 99 山鳥の庭に来てゐる寝正月
- 100 洗はるる成人の日のスニーカー